

出版案内

本書は、2年ほど前になる2022年6月に出版されました。まず、副題（ジェンダー・プラットフォーム・自民党）の奇妙さが目を引くかも知れません。この3つは、本書で取り扱っているトピックスをリストアップしたものとなっています。

通常、経済学における研究書は、財政学や金融論などといった特定の分野における主題を取り扱うものが多いでしょう。それに対して本書は、社会での行動に関する観察データ、そして、そういった様相を記述する行動モデルを適宜組み合わせることによって、従来からの経済学の領域を超えた広範な話題を手中に収めることができる点



『データとモデルの実践ミクロ経済学』
安達貴教 著
(慶應義塾大学出版会)

を強調したものになっています。「実践」とは、筆者なりの哲学をベースにした経済分析への取り組みを示す意味合いを持つものです。ごく手短かに述べますと、拙著では、

● 起業するかしないかということに関するジェンダー・ギャップの背景的要因として、パートタイムで働くことの意味合いが男女によって異なっていることが考えられる

● インターネット・ショッピングモデルなどのデジタル・プラットフォームの運営事業者が、ヴェンダー（出店業者）に対して「強気な態度を示すことには、構造的な背景があり、また、社会における取引量という観点からは、プラスに働いている部分もある



● 伝統的に、自民党の政治家がインフラ整備や経済プロジェクトに関係する大臣ポストに対して高い位置付けを与えてきたことは、組閣においてどの派閥がどのポストを獲得したといったデータ、そして、派閥間の関係を「交渉」と考える行動モデルを用いることで明らかにすることができるといったことが解説されています。

さて、皆さんがこれをお読みになっているのは、8月中旬頃でしょうか。対して私は、現在、締切当日の3月31日（日）に慌てて筆を取るー21世紀のデジタル社会に生きながら、平安時代からの歴史的遺産に与る京都に縁ある私たちは、そのような言い方を好むわけですがーという所業に及んでおります。それは、私が急げ者であるから（だけ）ではありません。

本書が販売されて約一カ月後、安倍晋三元首相が凶弾に倒れてから、本書の3番目のトピックである「自民党」は大きな過渡期にあると言え、「派閥の解消」にまで至っています。私としては、最新の状況を踏まえた上で本稿を執筆しようとしたことが、締切ギリギリになってしまった（主な）要因であります。結局、本稿ではその「成果」の反映は断念しました。

京都大学
経営管理大学院・経済学部教授

安達 貴教

時事問題を鮮やかに解説する才覚に乏しいことだけがその理由ではありません。「文章の新しさを保つためには新しいことを書いてはいけない」をモットーとしている私は、暑い夏に拙文をお読みいただく皆さんには、せめてそこに清廉さだけは求めるべきであるかと判断したからです。

ただし、自民党に限らず、ある程度の数を保つ政党であれば、派閥、あるいはそれに準ずるものが形成されること、それ自体は、むしろ望ましくもあるかもしれないといった愚見を書き留めておくことは、その目的に反するものではないでしょう。

さて、紙幅が尽きてしまいました。私は、2022年11月には、訳書『ジョン・ロビンソンとケインズー最強の女性経済学者はいかにして生まれたか』（慶應義塾大学出版会）、そして、本年6月には、単著『21世紀の市場と競争ーデジタル経済・プラットフォーム・不完全競争』（勁草書房）を出版しています。前者は本書一つ目のトピックであるジェンダーに、後者は二つ目のプラットフォームに関係しています。折角の「出版案内」の機会といたしまして、全三冊揃えてのご高覧をお勧めいたします（笑）。